蛇について
——神学的考察——

小林謙一

Eine theologische Betrachtung über die Schlange

Ken'ichi KOBAYASHI

0. まえがき

蛇は人間に昔から馴染み深い動物である。原っぱや森を歩いていて蛇に驚かされた経験をもつ人は少なくないであろう。家の主になった青大将の話もよく聞いたものである。最近の都会ではあまり見かけなくなったが，その反面，蛇を筆頭とする爬虫類がペットとして静かなブームになっているという。犬や猫，馬や牛といった哺乳類の暖かさと対極にある蛇の冷たさ，人間を拒む異質性が受けているのであろうか。このようなところにも蛇の一種の超越性が表れているように思える。蛇は，平凡な日常生活の中で突然出会う，異次元の生き物という性質をもっている。よく知られた昔話や伝説の中でも，蛇やその同類の龍は（犬や猿，雉，狐や狸，鶴，亀，鼠など，人間に親しい動物たちとは違って），必ず，恐ろしく，妖しい，だからこそ不思議な魅力をもった存在である。素戔嗚尊に退治される八岐大蛇（これは時には素戔嗚尊自身である），安珍清姫（女性の凄さ？），白蛇伝，蛇精の淫，各地に実在する，あるいは空想上の，龍神池にまつわる伝説，など。芥川龍之介の，『龍』，鴎外の『蛇』。どうも中国伝来らしい話が多いようである。道教や神仙思想系の起源をもつ説話がわが国に多く渡来したということであろう。ハムレットはクローディアスを，その所業をあてこすって，毒蛇と呼ぶ。ある人間を「蛇のよう」と形容する場合，陰険，冷酷，悪賢い，といった性質をさしている。龍の名を冠する地名・山名・川名・人名，その他のものの名も多く，気象現象には竜巻の名がある。蛇ににらまれた蛙，龍頭蛇尾，藪蛇，蛇の道は蛇，うわばみのような大酒飲み，といった言い回しにも，蛇や龍の記憶が反映しているだろう。ネッシーやイッシーなど，湖に棲む恐竜（明らかに龍のイメージ）の現代的伝説も健在である。他方，人間（特に子供）と仲良くなる龍もいる。“Puff, the magic dragon, lived by the sea...” また「少年ケニヤ」のワタルの友達の大蛇。しかしこれらは近年の創作で，例外であろう（主流はあくまでも，ターザンを初めとするジャングル冒険物語に欠かせない悪役たる大蛇である）。しかしそこでも，海や水との関連はきちんと守られている。

以下，その蛇について，宗教学的，次いで神学的に，考察してみよう。

1. 宗教学的に

1.1. 現 象

「気味の悪い異質な動物の典型が蛇である」[1]。蛇は人を噛み（毒蛇だったらおおごとになる），その眼差しは陰険で，獲物に巻きついて絞め殺す。どれも不気味で，人知をこえた脅威の力を感じさせ，異世界の存在と信じられる。「蛇は宇宙的な動物で，例えば，火を吹いて敵を滅ぼすラー神の額の蛇，日ごとに太陽神に打ち勝たれる雲の蛇アポフィス，ヴィシュヌ神を乗せる世界蛇アナンタ」[2]。それゆえ人間はその力をわがものにしようと努め，蛇はしばしばFetisch（呪物），またトーテムとされる。蛇のこのような性質は両義的で，一方では蛇神（インドのクリシュナ神話におけるナーガ[3]，メキシコの聖なるガラガラ蛇，アメリカ・インディアンの「翼のある蛇」など）として崇められる。西アフリカのある部族はコブラを守護神とし，嬰児にこの蛇の皮の尾に触れさせることが重要な儀礼であった[4]。他方では蛇は悪霊，サタンの化身として忌み嫌われる。この傾向が強まると，多頭のヒュドラや龍になる。蛇＝龍の崇拝と忌避は宗教史上に数多く普及している。主なものを挙げれば，古代エジプト，ヒッタイト，原始仏教，ギリシア先史時代，ことにクレタ島（ここでは宗教の三基本要素は女性性，デーモン的蛇，ダブル・アックスであった），古典期ギリシア（龍，Typhon, Python），ヘレニズムの密儀宗教（イニシエーションの儀礼には蛇にさわることも含まれていた），グノーシスのオフィス派（これについては後述），等々[5]。これらの多くの場合も，時に聖なる獣また神であり，時に退治さるべき悪の権化である。中国・日本にも，ナーガ崇拝に由来する龍王信仰がある。

このように蛇は人間の想像力をかき立てる動物であるから，さまざまなもののシンボルとなっている[6]。

1.1.1. 水

蛇や龍はぬめぬめしており，湿ったものというイメージをもち，川や海に住むと考えられる。この点に関しては，エリアーデが水のシンボリズムの項で詳しく（特に中国と東南アジアの龍について）扱っている[7]。

水はまた天地創造以前のカオスであるから，蛇また龍は，原始のカオスの力の体現である。バビロニアのTiamatなど，さまざまな海の怪物が人間に恐れられる。ヴェーダ神話では蛇の怪物たる龍ヴリトラが混沌の象徴である[8]。したがってインドでは家の建築のとき，世界を支えている蛇の頭に土台石をおくよう，占星術師が位置を決める。混沌からの宇宙創造をくりかえすわけである[9]。

1.1.2. 地

蛇は地を這い，地中にもぐる。蛇はすぐれてchthonisch（地的）な動物である。だから蛇は多くの神話で地下界へ通じる門や墓の番人とされ（エジプト），宝を守る番人となる（ギリシア，ゲルマン）。「財産の守護者」は，蛇の性質からして，ふさわしい役まわりであろう[10]。

この考えがいっそう洗練されると，一般に聖なる中心，とりわけ生命の木を守る番人となって，近づこうとする英雄を追い払おうと闘う[11]。

1.1.3. Seelentiere

蛇はSeele（生命，息，魂）と表象された。これは，眠っている，ないし死にゆく人間の口から，Seeleが蛇の形をして出ていくと考えられたからである[12]。また前項と関連して，蛇は墓に住むからである[13]。

古代ギリシア人は「家を守る蛇」を信仰した。つまりギリシアのHerosは一種の「家の霊」であって，敷居の下に埋められているが，ときおり家人に蛇の姿で現れる[14]。これも，前項の考えと結びついた表象であろう。

1.1.4. 生　命

蛇は脱皮を繰り返す。それゆえ蛇は若返り・再生のシンボルとなる。復活祭の卵はもともとは蛇の卵だったという[15]。それに蛇は丈夫で，生命力にあふれている。その頭の中にあると考えられた「蛇石」は医学的な力をもつと信じられた。ギリシアの医聖アスクレピオスは蛇を癒しと救いの仲介者と見た。（だから蛇は今でも医学の標識である。）ここにはまた，死者の国たる地下界と蛇の結びつきも暗示されている。一般に，生と死は切り離せない。死があってこそ再生がある。エリアーデが強調する「聖のアンビヴァレンス」である。

1.1.5. 性

生命と性も切り離せない。蛇は，その形状から，ファロスのシンボルとなり，多くの神話で女神の夫または愛人となっている。この場合，蛇は男性である。また，蛇の姿をした神を父とするHeroen（半神，英雄）も多い。ディオニュソス，アレクサンドロス，アウグストゥスなど。

1.1.6. 豊饒（Fruchtbarkeit）

生命と性と水の表象であれば，当然，蛇はまた豊饒のシンボルとなり，崇拝される。龍神には水乞いがなされる。また，地は母であるから，蛇にも母性原理が宿っており，この面からも豊饒と結びつく。この場合，蛇は女性である。オルフェウス教では地母神が蛇の姿となって世界を生む[16]。

1.1.7. 天の蛇

空にも蛇は投射される。虹，雲の蛇，稲妻，銀河。「月がその満虧によって死と再生の天空における表現であるとすれば，蛇はその地上における表現である，と言える」[17]。蛇は多くの民族において，月の地上における現れであり，したがって，豊饒・水・性・地のシンボルとなる[18]。

1.1.8. 火

『リグ・ヴェーダ』の光の神アグニは「猛り狂った蛇」と呼ばれる。その蛇的本性は，火の誕生のイメージに由来するであろう。世界にはじめて火が生まれたとき，それは「手も足もなく，両端を隠していた」。すなわち，頭と尾がつながったウロボロスのイメージであり，創造以前の原初の全体性が火のような蛇に表されているのである[19]。

1.1.9. まとめ

以上のように，蛇のシンボリズムを一応分けて考えて見てきたが，言うまでもなく，これらの多くが絡み合い，混じり合っているのが，原始・古代宗教，また中世民衆信仰の通例である。それらは近代合理主義の分析的論理ではなく，シンボリズムの論理によっているからであり，「象徴の併合主義的傾向」[20]が働くからである。蛇のさまざまなシンボルが，それ自体ちょうどウロボロスのように初めと終わりが一つながりになり，世界の全体性を暗示しているように見える。なお，中国や日本では龍また蛇は豊饒，生命，幸福のシンボルとして，肯定的にとらえられる傾向がヨーロッパより強いようである[21]。

1.2. オフィス派

古代後期のグノーシス主義の中に，オフィス派（Ophis＝蛇）という，キリスト教以前の宗教的・哲学的要素により近い，特異なセクトがあった。そもそもグノーシスは知識という意味であるから，彼らにとって，知恵を教える蛇はすなわち人間を救う超越者である。蛇は一性，全体性，永遠，の象徴であった。これと似ているが，よりユダヤ・キリスト教に近いセクトがナハシュ派で，その名は同じく蛇（ヘブライ語）に由来する。この派も世界の成立を神話論的に説明しようと思弁を展開し，そのさいヨハネ福音書3章14節のロゴス（ことば）を蛇と解した。聖餐のパンを生きた蛇によって聖化させるセクトもあった。しかし蛇はまたこの世の支配者でもあって，宇宙の建設のとき地上の領域を天のパラダイスから分離した，ともされた。広義のオフィス派は多くの分派に分かれ，それぞれに独自の神話論を主張し，旧約聖書への距離もさまざまであった。蛇は友好的な場合もあり，敵と受け取られることもあった[22]。

一般にグノーシス主義は現代のわれわれからとりわけ遠く，その上シンボリックな思弁で論を進めるので，たいへん分かりにくい。オフィス派も同様で，しかも内部で見解の相違があり，蛇に関してもはっきりしないが，それが名称になっていることから分かるように，蛇を非常に高い原理としたことは明らかである。友好的に見れば，宇宙創世の知恵ないしロゴス（宇宙の理法とも訳せる）が「賢い」蛇と同一視される。反対に創世記3章に近い立場をとれば，蛇はサタン＝この世の支配者であって，しかもグノーシス主義は，プラトンに由来する思想を受容し，物質・肉体を悪と見るのであるから，この世の創造者・支配者は悪の創始者ということになる。

1.3. 深層心理学的に

蛇は地の動物だから，母性を象徴（大地母神。とりわけウロボロスのイメージ）し，

ファロスに似た形状で男性性の原理となり，脱皮して変容と再生をくりかえすことから若返りのシンボルとなる[23]。このように，蛇の神話的表象は，そのまま深層心理学に適用される。またユング派によれば，神話は個人の心の成長の歴史ないし物語として解釈できる。つまりカオスまた闇は無意識であり，人間はそれと闘い，それを殺し，こうして自我を確立する，つまり，光にいたる。このカオスは蛇（ウロボロス）にシンボライズされ，グノーシス主義や錬金術で重要な意義をになっている[24]。

ユング派心理学は普遍的な神話が人間一般に共通して，太古からの記憶として下意識に保存されていると考える。これはあるレベルでは正しいと思われる。

フロイトも蛇の象徴を重視しているが，ここでは立ち入らない[25]。

1.4. 龍[26]

蛇が年をへて大きくなると，龍になる。「龍の表象は，最も重要なSeelentiereたる蛇・とかげがライオン・鳥と融合して生じる」[27]。その他日本や中国など，各地の伝説で，さまざまな動物が龍の構成要素になっている。龍は蛇よりもいっそう力強く，水，天との結びつきがいっそうはっきり表れるようである。

龍は原始の水，カオス，闇，また創造以前のEinerleiheit（一なるもの）を象徴する。すなわち，創造によって世界に形ができる前のautochthonな存在そのものをあらわす。これに対立するのが創造者また太陽神（光の神）であり，太陽を象徴する鳥と龍との闘いの神話は世界中に普及している。

このような宇宙創世を伝える神話とならんで，英雄の龍退治の物語も多い。スサノオ，アポロ，ヤソン，聖ゲオルギウスなど。これは，autochthonな（土着の）旧い秩序・王朝・社会体制・宗教と，新しいそれとの闘いという，歴史上の事件の記憶を保存する神話ないし伝説である。

新年の祭りにおいて神と龍の闘いを儀礼的に再現することも広く行われた。宇宙創造または歴史の始まりを更新し，世界ないし現存の秩序の再生を願ったのである。

1.5. 移り行き

他の多くの象徴の場合と同じく，蛇についても，象徴の多元化，転移・変化，時にはまた，堕落・幼稚化が観察され，その典型が「蛇石」である[28]。例えばダイアモンドも蛇石の一つで，元来その堅さによって絶対的実在を象徴していたが，近代になるとその美的・経済的価値だけが注目されるようになる。しかし今はこの点を詳論する必要はないであろう。

樹木の場合と同じく[29]，キリスト教の浸透とともに異教の聖所は悪霊＝龍の住処におとしめられていく。龍退治物語も，円環的時間観を破って，直線的時間すなわち歴史を可能にする，ということを反映しているのかもしれない[30]。それでも龍はヨーロッパのさまざまな民俗の行事の中に生き残った。豊饒祈願の行進に登場するのが，その代表的なものである[31]。

2. 神学的に

まず創造物語から見ていくことにしよう。そのさい前提として，動物一般と，その生活条件について，最小限見ておかなければならない。以下2.5.までは，およそカール・バルト『教会教義学』（KD）Ⅲ／1の見解にしたがって略述する[32]。

2.1. 地と水

創世記1章9～10節，創造の第三日の第一のわざが，地と海の分離である。海からの地の完全な解放は，闇からの光の解放と同じく，歴史の終わりに起こるであろう（ヨハネ黙示録21章1節，22章5節）が，今，地は海を自己の限界としてもつ。ここ（祭司資料）で記者が注目しているポイントは，限界と「しるし」ということである。

記者は明らかに別の神話の伝承によっているが，このできごとを神の奇跡としてとらえ直している。ここでは地と水は全く主体的でなく，ただ受動的に動かされている。カオス・虚無の危険を表す水が一ところに集められ，ひとまず人間から遠ざけられた。第二日の天と大水の分離のいっそうの具体化であり，神の善意の完成である。しかも同時に，地と人間の存在は，終末における第二の創造までの間は，その縁（へり，限界）をもたねばならぬ。

この神による限定は自己目的ではなく，しるしの性格をもつ。海は，天上の大洋が形而上的危険の物理的可視化であったように，たしかに存在はするが，しかし確実に防がれている脅威のしるしである。海は，無の力の表現であるから，神の怒りの道具として，人間を支配する可能性をもつ。しかし神の善意は神の怒りより大きい。海は，脅威という仕方で，主を讃え，人間に仕えるのである。地も，その存在が奇跡によるだけでなく，しるしの性格をもつ。地は，神が人間を保ち，支える恵みと忍耐のしるしとなっているのである。(161ff., 158f.)

水は，創造されざるもの，存在の限界の外にあるもの，すなわち無，災い（Unheil）の力の代表であり[33]，神とイスラエルに敵対する勢力の象徴であって，したがって蛇や龍，レヴィアタンやラハブといった，カオスの怪物の棲処である。しかし，神が海を叱るという記事が旧約聖書にはいくつかあり，水と海のふるまいに制限と抑制が課されるという記事もくりかえされている。これには，しるしの意味もこめられている。小さく，弱い契約の民が，敵対する世界の中で，再三危険に襲われる。神の助けがくりかえし与えられるほかないことを，そういう記事は明らかにしているのである。

これには歴史的状況も反映していることは，いうまでもない。イスラエルは海の民ではない。旧約聖書では海を渡るということは，荒野の流浪，捕囚，病気とならんで，最大の悲惨の姿であった。だから神は出エジプトのとき海を分けて地を現れさせ，イエスは海の上を歩いて波を鎮めたのであり，またパウロの大航海における海難とその克服にも，同じ意味が含まれている。これらのできごとは，神はいつか海を完全に支配するであろうという旧約聖書の預言の実現を予兆しているのである。そしてヨハネ黙示録21章1節の新しい天地には，もはや海がない。海の危険から，決定的に自由になっているのである。(164ff.)

なお，創世記2章，第二の創造物語（ヤーウェ資料）では，水の肯定的な側面（生命の源）について述べられている。これについては本紀要の「木について」の論文でいくらか論じた。

2.2. 水生動物（魚）

創造の第五日には水と空の動物が造られる。人間の創造がここではじめて告知される。人間は孤独ではない。人間に似るところをいくらかもつ生き物の世界がここにできあがる。動物は Auszeichnung（顕彰）をもつ。神に祝福されるのは動物と人間だけである。動物は相対的な自立性・個体性をもつ身体存在であって，生命はここでいっそう高次な，本来のあり方を獲得したのである。

しかも，海と空という，人間から遠く，fremd で，カオスの要素をもつ危険な領域で，動物の創造が始まる。注目すべきことに，最初に造られたのが「大きな海の怪物」である。これが人間の生存領域の限界のしるしにもなっていることは，明らかである。旧約聖書の他の箇所ではそれらは総じて不気味で危険な生き物とされているが，この箇所ではまだ，人間に近く，神を讃える生き物である。人間の罪によって世界が変わってしまい，不可能な可能性が転倒した現実性をもつ以前，本来の規定では，そのようだったのである（終末における動物たちの平和のヴィジョンを参照のこと）。ここでは素材となった神話が非神話化されていることが注目される。怪物は，それ自身悪霊なのではない。実を言えば，水に生きる動物は旧約聖書においても，結局は恐るべき怪物ではない。ヨナ書の大魚も，神の命令に従っている。さらに新約聖書になると，それはパンとならぶ人間の食物となる。大漁は教会の成立を表す譬えであり，魚の絵はイエス・キリストの標章となり，水は洗礼のサクラメントの要素になる。── この危険な場所にも，人間の仲間がいる。この危険な所でも，動物が生きることを許されている。まして，いっそう安全な所にいる人間は，いっそう安んじて生きることができる。

この日はじめて神は祝福を与えたもう。動物はみずから動く。それが神からの離反に向かう動きでなく，神の意思に従った繁栄であるためには，祝福が必要なのである。また，世代の継続，したがって自然界の存続，つまり生殖には，神の祝福・約束（Verheißung）・許可が必要なのである。それが神の行為に似ているからである。── 祝福において神は直接に動物に語りかける（22節）。（3章ではエデンの園で蛇が語りかけられる。）ここでは動物は聴くだけで，みずから言葉は発しない。不服従は問題にならないのである。つまり動物は受動的な自由をもつだけで，人間とは違うということである。能動的な自由が，人間にだけ与えられた恵みの秘密である。

こうしてここではじめて，世代の継続，すなわち自然史という形で，創造を継続する歴史という観念が現れる。またこの祝福は，被造物との契約（Bund）締結の予型，いわば前奏になっている。不気味な，神の怒りのしるしの領域の中でまさに，恵みの契約が始まるのである。（187ff.，191ff.）

2. 3. 地の動物

第六日の前半には陸の動物が造られる。彼らは水の動物よりいっそう人間に近い。彼らも祝福され，事実的に神のことばに服従している。彼らは人間の生活の不可欠の仲間である。特徴的なことに，神が人間に対して行為をするとき，必ず動物がそこにいあわせる。ノアの方舟には動物の代表が乗せられた，イスラエルに対する裁きと終末時の平和の契約では，動物も当事者である，安息日の掟では牛やろばも働いてはならない，イエスは公生涯に登場する前，荒野で（天使と）動物たちと共にあった，ロマ書8章19節以下には，被造物全体の呻きが語られている，など。俗な表現で言えば，人間と動物は一蓮托生なのである。

彼らは，端的に存在することによって，創造を承認し，神に服従し，神の意思を実現している。彼らは，こうして，神と人間の歴史の生きた想起，無言の先駆者・証人となっている。とりわけ動物は殺され，犠牲に捧げられる。これこそ，人間の歴史の中心，人の子の犠牲の予兆・比喩である。だから，動物と人間の創造は同じ日に行われるのである。

24節に「地は…地の獣を生ぜよ」[34] とあるとおり，動物と地の間には実在的な関連があるが，人間と地の間には，ない。地は人間を生まない。聖書では地母神なるものは不可能である。(197ff., 200ff.)

地と人間とのいっそう実在的な関係は2章（ヤーウェ資料）に叙述されているが，そこでも地が人間を生むのではなく，神が土から人間を造るのである。ここでは，同じように土から造られるという点で，人間と動物の同等性が強調されている。また，人間（男）の助け手として，初めは「すべての野の獣，すべての空の鳥，すべての家畜」（2章19・20節）が連れて来られたが，それら動物を「ふさわしい助け手」でありうるかどうか，テストした後，斥けた，という記事は，暗黙のうちに動物崇拝を否定している。もっともこの記事は，もっぱら人間（それも，男と女）の創造に関心を集中していて，動物のことは本筋ではない。(267f., 279, 335, 364ff.)

なおここには，最初の人間が動物たちに次々と名前をつけるという興味深い記事（19～20節）があり，言語の起源の問題と関連してさかんに論じられるが，本稿では扱わない。ここではただ，それが人間による「追創造の行為」「秩序づけて自分のものにする作業」[35] であって，次項に述べる動物支配と本質的に同じ意味をもつ，ということだけを知っておけばよいであろう。

2. 4. 動物支配

1章28節には人間に動物を支配することが命じられている。これは人間が imago dei（神の像・かたち）たることの帰結である[36]。人間は動物より強い，ということではない。人間は第二の創造者ではなく，動物の絶対的支配者でもない。人間はただ，神の代理人，委託の実行者にすぎず，いわば管理人なのである（エデンの園のアダムが果樹園の庭師であったように）。人間は動物界の primus inter pares なのである。だからこの支配は限定されたもので，Blutgerichtshoheit（生死の決定権）を含まない。人間が動

物より高い地位を与えられているのは，ただ imago dei を許されていることだけである。理性をもつといったテクニカルな優越性が動物支配を根拠づけるのではない。したがって人間の優越は本性・原理上のものではなく，ただ神の恵みによるものである。それは人間の本質でも自己目的でもなく，人間の規定にただ付け加えられたものにすぎない。

人間はこの意味の動物支配の遂行にさいしても，神の祝福を必要とする。この支配も，生殖と同じく，神の創造の行為に近い行為だから，権威と権限の付与，約束が不可欠なのである。現在だれもが知っているように，人間の動物支配はあやういもので，神の祝福がなければ，すぐに邪悪になったり，効果のないものになってしまうからである。(210ff., 232)

2.5. 動物食

創造物語では，両資料とも，人間および動物に食物として与えられたのは植物（野生の木の実と草）だけである。アダムは初めはヴェジタリアンであった。すぐ上に述べたように，人間と動物は同じ平面上に生存し，同等の資格で神のパートナーであり，この平和の空間では殺生は存在しなかった。生命[37]を与えるのも取り去るのも，ただ神のみの権利である。

事情が変わるのは，アダムの罪の後，恵みの契約の歴史の時代に入ってからである。ここでは Blutgericht が許される（創世記9章2節を見よ）。その決定的な理由は，契約の最後の成就はまさに血による和解でなければならないから，ということである。これを遠くに見やりながら，動物が犠牲に捧げられた。人間の生命の代理的なしるしとして，無垢の，すなわち「清い」動物が捧げられた。肉食はこの犠牲の動物を食することにほかならない。もちろん，肉食は罪の領域に生きなければならない人間に，恵みとして許され，正しいとされた一種の中間的な規定で，相対性を免れない。創造の記事は，おそらく終末時の人間と動物の全般的平和を念頭におきつつ，約束として肉食を（implizit に）禁止しているのである。(233, 237ff.)

2.6. 蛇と龍

2.6.1. 創世記3章の蛇

前に2.1.から2.5.まで，地と水（海）とそこに棲む動物について言われたことは，すべて蛇にもあてはまる。（ただし，蛇は「汚れた」動物なので，食用にはならない。）「だから創世記記者の意図としては，蛇は『悪霊的』な力の象徴ではなく，ましてサタンの象徴でもない」[38]。蛇も，「神がその造られたすべてのものを御覧になると，見よ，非常によかった」（創世記1章31節）ものに含まれる。しかし，海は造られたものの限界の外の，つまり無の要素を残している。造るということは，造られないものも残るということだからであり，存在はその限界に非存在をもたざるを得ないからである。創造の本来の世界では無は無にとどまっていたが，その無の中で，本来不可能な可能性でしかなかった可能性が，説明しがたい仕方で，現実性をもってしまう。存在の世界の中に，奇妙な，負の現実が，権利もないのに，住みついてしまう[39]。これが，創世記3章に堕

罪の物語として描かれることであり，そこにおいて，人間に係わって蛇が，説明できない，不可思議な役を演じる。その後，蛇の現れ方は変わる。一言にまとめれば，「呪術的動物そのもの（par excellence）たる蛇」[40] になるのである。

ボンヘッファーの神学的釈義[41] からいくつかの点を補おう。

「敬虔な蛇としてのみ，蛇は邪悪なのである…しかし世界最初の敬虔な問いとともに，悪が出現したのだ」[42]。創造があってはじめて無が存在の外に姿を現し，善い被造世界があってはじめて悪の可能性が，ポジに対するネガのように，生じてしまう。無の限界をもたない存在，悪に対照されない全き善，というものは，人間には思考不可能である。

「アダムはもはや被造物ではない…アダムは神のよう（sicut deus）である。…限界と一緒に，アダムは自分の被造物性をも失う」[43]。

「悪がなぜ存在するかという問いは神学的な問いではない。なぜなら，その問いは，われわれに課せられた罪人としての実存の背後に回り込む可能性を前提しているからである。この問いにもし答えられるとしたら，われわれは罪人ではない」[44]。つまり，自分の髪の毛をつかんで自分を引っ張り上げようとするようなものだ，ということである。聖書は，したがってまた神学は，神の秘密を究めることはできない。あらゆることを（いつかは）理解しつくせる，と思うのは，まさにプロメテウス的または悪魔的な蛇の思想であり，「神のような」人間の抱く妄想である[45]。

「かつては直接に神の創造の言葉を表現していた木や動物が，今や，しばしばグロテスクな形で，理解不可能となり，闇に身を隠す暴君の恣意を示す」[46]。被造世界全体の現実が今や，奇妙な，ありうべからざる相貌を呈するにいたったのである。

KD では創造物語以外に，Ⅳ／1 の，罪を主題とする第60節に何箇所か，蛇についての言及がある[47]。

罪は absurd なもの，無に自己を開くこと，それへと決断することである── ちょうど，創世記で人間がカオスの動物たる蛇の声に聴き従ったように（454）。蛇の言葉はカオスの思想で，それ自体，力強いが，偽りであり，破滅にいたるものである（469）。

創世記 3 章の蛇には真の受肉（人間化）の気配がある。神をおそれ，しかも神を否定するという，Mündigwerden（独り立ちできる大人になる── もともとボンヘッファーの思想）の勧めである。人間が自分の力で判断し，行動しようとする。自律，成熟，啓蒙，非神話化といった近代のスローガンはすべて，蛇の末裔から出ているのではないか？（481 f.）

「蛇がめざしたものは，倫理の基礎づけである！」蛇が行ったことは，神の戒めの分析・解体であり，蛇がそそのかしたのは，善悪を知ろうという悪しき欲望だからである。これこそ，本来の人間に与えられた服従の自由の反対である（497）。人間は自分で判断し，裁きを下す権利の可能性に目が開けたが，その結果，実は正・不正の別に盲目となり，「万物の父」たる戦争をくりかえしている（501）。

「賢い蛇は全く理論的に語るだけで，結論を引き出し，それに応じて欲し，行動することは全く人間に委ねている。蛇は罪を犯さない。蛇は蛇にすぎず，その動物的人格に

おいて，人間の罪の不可能な可能性を表す」(514)。

はじめの一つを除く五箇所は「人間の思い上がり（Hochmut)」の項からの引用で，いずれもタイタン的な人間のヒュブリスを論じている。

以上の叙述に暗示されているように，創世記3章の蛇は，実は主役ではない。「蛇への言及はここではほとんど，事のついでのような感じがあり，…全く非神話的で，…もっぱら人間と人間の罪だけが問題なのであり，それゆえ記者は，悪をいかなる風にもせよ客観化することを，慎重に避けている」[48]。「蛇が何であるか，ではなく，蛇が何を言うか，がわれわれの問題である」[49]。アダムとエヴァが善悪を知る木の実を食べたあと，この二人には神の審問があり，二人はそれぞれ言い訳をしているが，「蛇への審問，蛇に対する神の語りかけは，特徴的なことに，欠けている」[50]。

3章14～15節の蛇に対する神の判決は，蛇がなぜ四つ足で歩かなくなったか，また，なぜ人間が蛇を嫌い，蛇が人間を襲うのかを説明する原因譚になっている[51]。創世記記者は，両者の敵対関係の起源をただ心理的な面に求めるのではなく，端的に神の呪いに帰している。ここに，創造の秩序においては可能性の無でしかなかったものが，呪われた悪として，ネガティヴな現実性を獲得し，旧新約聖書の，さらには一般宗教学的な，不気味な動物たる蛇＝龍に象徴され，そのイメージがいよいよ肥大していく，そのそもそもの端緒がある。この蛇との闘いは世の終わりまで決着がつかない。

2. 6. 2.

出エジプト記4章3節，7章9～12節に，モーセとアロンが杖を蛇に変えた（7章ではその蛇は，エジプトの魔法使いが変えた蛇を呑みこむ）という奇跡が叙述されている。7章では鰐ともされるが，そうだとすれば，もともと蛇だったのを記者が変えたもので，大きな爬虫類をさす[52]。ノートは蛇と訳している[53]。注釈者は蛇そのものには関心を示さず，呪術の面でも異教の神々にまさるヤーウェの力を強調している[54]が，この記事の背後には，蛇の変身＝再生能力と，他の動物を呑みこむ恐ろしい力への畏怖がかすかに残っているように感じられる。

レビ記11章および申命記14章に列挙されている動物（レビ記には蛇を含む）は典型的なトーテム動物またSeelentiereであって，「聖なる」動物と「汚れた」動物がもともと等価だったことがわかる。[55]

おそらくアッシリア・バビロニア起源と思われる「龍の神話がイスラエルの天地創造物語に再び現れる。ヤーウェはラハブまたはレヴィアタンを殺す，ないし砕く（詩篇89篇11節，ヨブ記26章12節，40章20節）。…創世記3章のケルビム（グリフィン）もその種の龍かもしれない」[56]。しかしフォン・ラートによれば，「ケルビムは古代オリエントの世界観では翼をもった架空の存在で，半人半獣，神に随伴し，聖所を守る任務をもつ」ものであり[57]，関根正雄も同様の見解をとっている[58]。その姿は，はっきりしないようである。後世には一般にケルビムは，次項にふれるセラフィムとともに，天使の一種とされるようになる。

2.6.3. 青銅の蛇

旧約聖書民数記21章4～9節には「青銅の蛇」に関する奇妙な記事がある。ここでモーセによって造られた青銅の蛇は，列王記下18章4節で，ヒゼキヤ王によって打ち砕かれる。これは元来，ミデアン人またはエブス人・カナン人の礼拝の対象だったらしく，蛇の形の杖で，蛇の霊をあらわし，(女) 神のシンボルとして，イシュタルの祭壇に刻まれ，フェニキアのアスクレピオス神殿にもあった[59]。ではなぜモーセはこのような偶像とも思われるものを神の命令によって造ったのか。マルティン・ノートの注解[60] によると，二つの箇所は互いに独立した伝承にもとづいており，「青銅の蛇」もそれぞれ違うものであったのが混同された，ということである。民数記の蛇（＝セラフィム ）は翼をもった炎の蛇で，通常の蛇より危険なものと考えられ，旧約聖書に何度か登場する（イザヤ書14章29節，30章6節，申命記8章15節)。イザヤ6章2，6節のセラフィムも，同じ表象から発展して，神に仕える存在になったものであろう[61]。

民数記の記事の言いたいことは明らかである。イスラエルの民の神への服従がためされているのであり，神の力は荒野の恐るべき力より強いことが示される。注意すべきことは，青銅の蛇は決して拝まれていないということである。それはいわば神の道具になっていて，蛇にかまれた人がそれを仰げば命が助かる，という機能を果たすためにだけ造られたのである。青銅の蛇そのものが神または神のシンボルとなって礼拝されるようになれば，壊されなければならない。

新約聖書ヨハネ福音書3章14節「ちょうどモーセが荒野で銅の蛇を竿の先に挙げたように，人の子わたしも十字架に挙げられて天に上らねばならない」[62]。福音書記者は，続く15節に説明があるように，生命を救う青銅の蛇がキリストによる永遠の命の予型 (Typos) である，と解しているのである。以後，青銅の蛇と十字架とキリストは，伝説や図像においてしばしば結びついて現れる。

2.6.4. 『ベルと龍』

旧約聖書続編（外典）に『ダニエル書補遺　ベルと龍』がある。預言者ダニエルが，バビロニア人が崇めていたベル神と龍神の二つの偶像を滅ぼす物語である。全く英雄伝説・聖者伝説的作品で，特に神学的意味はないように思われる。

2.6.5. 「蛇のように賢く」

新約聖書マタイ福音書10章16節のイエスの言葉，「わたしはあなたがたを遣わす。それは狼の群れに羊を送り込むようなものだ。だから，蛇のように賢く，鳩のように素直になりなさい」[63] について，バルトはKDの和解論，「苦境にあるキリスト者」の項で大略次のように解釈している[64]。

キリスト者は狼の群れに入っていく羊のように，能力も寄るべもなく無防備である。ここで「蛇のように」を，自分の道をたくみに見つけ出す洗練された外交官のようであれ，ととるのは間違っている。無邪気・無害な鳩のようであれ，というのがこの句の眼目である。並列の接続詞 $\kappa\alpha\iota$ は，他の箇所同様，後の句が前の句を凌駕し，尖鋭化す

る弁証法的な言い方である。だから弟子たちの「蛇の賢さ」は，世の常の外交術ではなく，世からは最高に非外交的に見えるであろうが，鳩の無邪気さの賢さであるべきだ。つまり，邪悪な世の中で，ありのままのキリスト者であれ，というのである。8～9節に，備えをせずに行け，ただで与えよ，という指示も同じ趣旨である。

少し強引な解釈のようにも思えるが，たしかに，自分のさかしらに驕らず，ひたすら神に任せ，誓わず，キルケゴール風にいえば崖っぷちから手を離し，流れのほとりの木のようにまっすぐ立つ，というのがキリスト者のあり方だ，ということからすると，バルトの理解も聖書の根本的な姿勢にかなっていると思う。

注解書を見ると，シュニーヴィントは，「何がなんでも殉教せよというのではない。イエスが逃げよとすすめている箇所もあり（Mt. 10, 23 ; 24, 16），裁判所で申し開きをせよ（v. 17ff.）とも言っている。またルカ 21, 1 では，神ご自身から知恵が授けられるであろうと，はっきり言われている」と解釈している[65]。シュヴァイツァーは，その賢さが逃走と理性的な申し開きを意味する可能性を否定はしないが，信徒の「賢さは外交的策略であってはならず，いかなる仮面もかぶらない生の純粋さの中に保たれねばならぬ」と説明して[66]，折衷的な見方をとっている。

なお，「蛇のように賢く（klug）」は「蛇の知恵（Schlangenweisheit）」とは違う。後者は，いうまでもなく創世記 3 章の蛇の，創造者なる神の意思より自分の方がすぐれているとする傲慢な思弁のことである[67]。

2. 6. 6. ヨハネ黙示録の龍

ヨハネ黙示録12・13章には，世の終わりの前に，太陽を着て子を産もうとしている女を迫害し，大天使ミカエルと戦って敗れる龍（蛇）が登場する。ここには多くの民族に共通する神話が根底にあり，著者がそれをキリスト教宣教に利用していることが明らかである[68]。この龍の姿に聖書のサタン＝蛇のあらゆる表れが集中されている。エデンの園で女を誘惑した蛇，カオスの力の体現たる海の怪物（詩篇74篇13～14節の龍とレヴィアタン，イザヤ書51章 9 節の龍とラハブ，エゼキエル書29章 3 ～ 4 節の「ナイルの巨大な鰐」，ダニエル書 7 章 7 節の「海から現れた」大きな獣，など），ヨブ記の「訴える者」，荒野でイエスを誘惑し，この世の支配者であるサタン，ルカ福音書10章18～19節のサタン・蛇・さそり，など。「誘惑の蛇とサタンの同一化はユダヤ教内部で比較的遅く始まったが，黙示録の著者はすでにそれをみずから遂行している」[69]。龍は自分の住まいである最下層の天から地と海に追い落とされ（12章 9，12節），そこでしばらく猶予が与えられる。海（水）は龍の領分で，「蛇はその口から河のような水を女の後に吐き出して，彼女を浚おうとしたけれども」（15節），地は女（マリアではなく，神の真の民たる教会）の味方で，「地が女を助け，地がその口を開けて，龍の口から吐き出した河を飲み干した」（16節）[70]。これには「母なる大地」という太古の観念が遠く影響しているかもしれないが，それよりも，創世記 1 ・ 2 章での地の積極的な意味づけが聖書の終わりまで一貫している，ということであろう。

なおこの龍が赤い色をしている（ 3 節）のは， 6 章 4 節と同じく，殺人者であること

を示している[71]。また，多くの神話では龍との闘いが太古に置かれているのに対し，ここでは終末時のできごとの予言の形をとっていることも注目される[72]。

13章にはいると，サタンの代理たる第一の獣が海から上陸してくる。これはローマ帝国のことであろう。ここはローマ書13章とならぶ，聖書の国家観の古典的箇所であるが，いまは詳述する必要はあるまい。

12節，第二の獣が「龍のように語った」という記述は創世記3章の蛇の狡猾な雄弁を想い起こさせる[73]。

龍は16章13節にも短く登場する。その口から「蛙のような穢れた霊が出て来る」。パールシー教では蛙は闇の神のしもべであった[74]。

龍が最後に姿を見せるのは20章1～3節である。彼は鎖で縛られて深淵の底に幽閉される。千年後，サタンは釈放されるが，それに続く最後の戦いは一瞬にして決せられ，サタンは「火と硫黄の池に放り込まれ」，「永遠より永遠に苦しめられるであろう」(10節)。

こうして，旧約聖書の預言が実現する。「その日，主は厳しく，大きく，強い剣をもって，逃げる蛇レビヤタン，曲がりくねる蛇レビヤタンを罰し，また海にいる竜を殺される」(イザヤ書26章1節)。また同じことを別のイメージで表現すれば，平和の王の治世において，「狼は小羊と共に宿り，豹は子山羊と共に伏す。…獅子も牛もひとしく干し草を食らう。乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ，幼子は蝮の巣に手を入れる」(イザヤ書11章6～8節)。

2.6.7. 十字架

十字架は生命の木であると信じられた[75]が，十字架に蛇が絡みついた絵がしばしば見られる[76]。1.に述べたように，蛇も生命と豊饒のシンボルであって，生命の木を守る蛇と同じく，似た表象が一つに結合する例であろう。

2.6.8. 聖ゲオルギウス

中世のキリスト教聖人伝『黄金伝説』の第56話が「聖ゲオルギウス」伝である[77]。信仰篤き騎士が龍を退治して王女を救い，住民の苦しみを除き，キリスト教化し，また拷問をも奇跡の助けによって無傷で切り抜け，魔術師との戦いに勝つ。キリスト教に回心した王妃が，身代わりのように殉教する。ゲオルギウスの聖遺物も奇跡を行う。このように，典型的な聖者伝説である。

龍は「毒気を吹きかけて悪疫を蔓延させた」(76)。龍は病気のことらしい。龍はもちろん「湖に棲む」(78)。国王がゲオルギウスのために建てた美しい教会では，「祭壇から清水が湧きだして，この水を飲んだすべての病人たちは，たちまち健康になった」(79)。恐ろしい水と聖なる水の対比，病苦を癒す神（というより，聖母マリア）という主題が典型的に見られる。「異教の神々は，すべて悪霊であるが，われらの主は，天をおつくりになった」(80)。

この龍退治の物語は，ギリシア神話のペルセウスとアンドロメダの物語に原型があると考えられる[78]。しかし，龍または怪物を退治する物語は，バビロニアをはじめ（その

遠いこだまが旧約聖書，とりわけ原始のカオスから天地を分かつ記事に響いているであろう，ということは前に述べた)，古今東西に分布している。

この聖人は非常に人気を集めた。ゲオルク，ジョージの名は欧米にきわめて多い。信仰深い戦士のイメージが好まれるのであろう。国王の名にもよく使われる。国名にもなる。アメリカのジョージア州（ジョージⅡ世王にちなむ)，旧ソ連のグルジア（ドイツ語でGeorgien)。またウェールズの国旗は龍である。聖ゲオルギウスの名を戴く教会ももちろん多く，騎士団の名称としても好まれた。また言うまでもなく，多くの職業の守護聖人となっている。

ゲオルギウスの龍退治の場は多くの絵画に描かれている。龍がサタンの象徴だから，ことに好まれたのであろう。また，「龍は，小犬のようにおとなしく王女のあとについてきた」(79) という場面は，クリュニー修道院の処女と一角獣のタピスリーを想い起こさせる。もっともキリスト教図像学では，このモチーフは処女マリアの胎に宿った神の独り子を表し，また龍によって毒となった泉を一角獣（角が十字架の象徴）が清める，という伝承もある[79]。中世ヨーロッパに広く流布した説話では，一角獣と龍と蛇が並んで現れる[80]。筆者には，ゲオルギウスの聖者伝では龍と一角獣のイメージが重なったのではないかと思われる。

ミッドサッマー・イヴの祭では，宴のエンターテインメントに龍のからくりが現れたり，聖ゲオルギウスと龍の戦いの劇が演じられたりした[81]。

聖ゲオルギウスをめぐる，以上にその一端を紹介した一群の伝承は，言うまでもなく民俗信仰の所産，またそれと，それを教化に利用したローマ・カトリック教会の教理（むしろ政策）との融合ないし妥協の産物であって，神学的意味は小さい。

2.6.9. 動物象徴学

古い動物崇拝はキリスト教芸術の動物象徴学の中に，姿を変えて生き残り，蛇と龍は，言うまでもなくサタン・悪霊の力の象徴となる[82]。もう少し詳しく見れば[83]，蛇の絵が表すのはまずもちろん，邪悪 (61, 129, 151, 189)，神への反逆 (160)，またそこから出るさまざまの悪徳，すなわち，誘惑また偽りの光輝 (11)，異端 (19)，邪宗 (151)，虚偽と謀略 (50, 173)，憎悪 (98)，絶望 (103)，嫉妬 (3, 81)，姦通 (34)，苦痛 (56)，苦悩 (67) などであるが，さらに，古い思考を残して，アフリカないし豊饒 (6)，医術（9。イエスは医者でもあった)，永遠（クロノスの右手のウロボロス型の蛇。193) などのアレゴリーとなり，しかしまた，思慮 (91)，熟慮 (92)，知力 (122)，論理学 (135)，警戒（統治者に必要な。137) など，賢さのイメージから来る図像表現もある。

3. 結　論

以上に触れたほかにも，蛇と龍に関する宗教史上の例をさがせば切りがないであろう。本稿では宗教現象学的見地から，神学的な見方との対比のために必要最小限の要素を確認したにとどまる。

神学的には，まず第一に，無からの悪・罪の起源と，終末におけるその滅亡の問題が

蛇に託して語られている，ということである。しかしそれは，蛇が単なる象徴にすぎないということではない。創造は空想ではなく，われわれがふつう考える（科学的）現実でもない[84]。したがって創造の記事は，通常の歴史や神話の記述ではなく，独自のジャンル，Sage[85] によらなければならなかった。ここでの蛇も，神の（第一の）現実にいっそう近い現実性をもっている。蛇はエデンの園，神のごく近くに住み，親しく神と言葉を交わす，というようにSage的に叙述されている。感覚的に言い換えれば，いっそう深い，いっそう密度の濃い現実の中にいたのである。

しかし，それとともに第二に，動物そのものの存在が意味づけられ，その中で蛇も位置を占める，ということである。造られた初め，つまり本来のあり方としては，蛇もふつうの動物の一つで，他の動物とならんで，独自の個性と尊厳を有していた。「すべての種類の地に這うもの」も，神に「見てよしとされた」（創世記1章25節）ものだったのである。しかし人間の堕罪ののち，「被造物全体が虚無に服し」，本来の存在を求めて呻いている（ローマ書8章20～22節）。その中で，蛇は特別の性質を得た。元来の賢さが狡猾さとなり，それ以上に，悪と虚無を一身に体現する役割を担わされるにいたったのである。しかし，第二の創造，楽園の回復，新しい天地，すなわちもはや海も夜もなく，悪が地を払い，無の力の脅威が滅ぼされ，善と喜びと感謝だけがある平和の世界では，蛇は再び善良，無害で美しく，他の動物より賢い動物となるであろう。

注

1） G. van der Leeuw, Phänomenologie der Religion, 4. Aufl. 1977, Tübingen, S. 68.
2） Fr. Heiler, Erscheinungsformen und Wesen der Religion, 2. Aufl. 1979, Kohlhammer, S. 85.
3） 山口昌男『道化の民俗学』筑摩書房，1985, 234頁以下，他。ナーガは水の神とも呼ばれる。
4） フレイザー『金枝篇』（四），永橋卓介訳，岩波文庫，47頁。
5） Fr. Heiler, Die Religionen der Menschheit, Reclam, 3. Aufl. 1980, SS. 20, 44, 54, 107, 131, 188, 288f., 291, 328, 340.
6） 以下の分類は Die Religion in Geschichte und Gegenwart (RGG), 3. Aufl., Art. Schlange, von A. Schimmel. をもとにして筆者が整理・拡充したものである。
7） エリアーデ著作集2『豊饒と再生　宗教学概論2』久米博訳，せりか書房，1978, 85頁以下。
8） エリアーデ著作集6『悪魔と両性具有』宮治昭訳，せりか，1973, 114頁以下。
9） エリアーデ著作集3『聖なる空間と時間　宗教学概論3』久米博訳，せりか書房，1981, 74頁。
10） 樺山紘一『西東禽獣譚』思潮社，1986, 111～112頁。
11） エリアーデ『豊饒と再生』 208頁以下。
12） 同様のことは，『金枝篇』（二），69頁以下，特に74, 76, 86頁に報告されている。そこでは霊魂は小鳥，二十日鼠，虫の姿で表象されている。
13） Heiler, Erscheinungsformen..., S. 79. ちなみにハイラーは同所で，創世記3章のエヴァの名は蛇の名前かもしれないと言う。関根正雄は『創世記』岩波文庫，の註釈で，エヴァの語源を「生命」「生ける者」等の語に関連させる。
14） v. d. Leeuw, op. cit. SS. 69, 138.
15） 石井美樹子『聖母マリアの謎』白水社，1988, 98頁。
16） 同所。
17） 山口昌男『知の祝祭』河出文庫，1988, 240頁。

18) エリアーデ『豊饒と再生』第四章「月と月の神秘学」に多数の事例が集められている。
19) 同『悪魔と両性具有』117頁,『聖なる時間と空間』130頁。
20) 同『聖なる時間と空間』182頁。
21) 石井前掲書 94頁。また，注7) 参照。
22) Heiler, Religionen..., S. 340, および RGG, Art. Ophiten und Naassener, von G. Kretschmar による。なお荒井献『原始キリスト教とグノーシス主義』岩波，1971，127頁以下，柴田有『グノーシスと古代宇宙論』勁草書房,1982，29頁参照。
23) 河合隼雄『影の現象学』講談社学術文庫，1987，137頁以下。
24) 河合隼雄『昔話と日本人の心』岩波，1982，20頁以下。
25) なおレヴィ＝ストロース『やきもち焼きの土器つくり』渡辺公三訳，みすず書房，1990，264頁以下のフロイト批判参照。
26) この項は主として RGG，Art. Drache，von M. Eliade による。
27) Heiler, Erscheinungsformen..., S. 85.
28) エリアーデ『聖なる空間と時間』166頁以下。
29) これについては本紀要本号の拙論「木について ── 神学的考察」参照。
30) 平凡社大百科辞典「竜」，荒俣宏，による。
31) マリ＝フランス・グースカン『フランスの祭りと暦 ── 五月の女王とドラゴン』樋口淳訳，原書房，1991，に豊富な例が挙げられている。
32) Karl Barth, Kirchliche Dogmatik Ⅲ／1, EVZ-Verlag, 4. Aufl. 1970. 本書からの引用・要約は本文中の（　）内にそのページ数を示す。
33) 地を取り巻いている水には，「もはや直接にカオス的とは言えないが，それでもなおどこかしら神と創造に敵対するところが残っている。」Das Alte Testament Deutsch (ATD) 2／4, Das erste Buch Mose, Genesis, 9. Aufl. 1972, von G. v. Rad, S. 34.
34) 訳文は『創世記』岩波文庫，関根正雄訳による。
35) ATD, Genesis, S. 58.
36) これについては拙論「カール・バルトにおける神の像の問題」本紀要第24輯，1978，で論じた。なお，フォン・ラートはこの動物支配の委託に神の像を見ている。ATD, Genesis, S. 39.
37) 「植物は古代ヘブライ人の見方では生命に参与していない。」AaO. S. 36.
38) AaO, S. 61.
39) このプロセスを主として人間の心理の面から見事に描いているのが，キルケゴールの『不安の概念』である。
40) Barth, KD Ⅲ／1, S. 329.
41) D. Bonhoeffer, Schöpfung und Fall／Versuchung, Chr. Kaiser Verlag, 1968.
42) AaO, S. 77
43) AaO. S. 84f. 強調は原著者。
44) AaO. S. 90. 強調は原著者。
45) この点については，前掲拙論「木について」の「善悪を知る木」の項で論じた。
46) Bonhoeffer, op. cit. S. 100f.
47) Barth, KD Ⅳ／1, tvz, 1953, S. 395ff. 以下，本書からの引用は本文中の（　）内にそのページ数を示す。
48) ATD, Genesis, S. 61.
49) AaO. S. 62.
50) AaO. S. 65.
51) 岩波文庫，関根正雄訳，の註釈。
52) 『出エジプト記』岩波文庫，関根正雄訳，の註釈。
53) ATD 5, Exodus, 8. Aufl. 1988, von M. Noth, S. 45.
54) AaO. S. 32, 54f.
55) Heiler, Erscheinungsformen..., S. 80.（後代，「聖＝浄」対「俗＝不浄」というふうに逆転したのは，倫理的観念の影響による。S. 81.）
56) AaO. S. 85.

57) ATD, Genesis, S. 70.
58) 『創世記』岩波文庫の註釈。
59) RGG, Art. Eherne Schlange, von K. Galling. ハイラーによっても，旧約聖書に出てくるセラフィムは元来は荒野の蛇である。Heiler, Erscheinungsformen..., S. 85.
60) ATD 7, Das 4. Buch Mose, Numeri, von M. Noth, 4. Aufl. 1982, S. 137f.
61) 関根正雄によれば「蛇の形をし，翼をもった天使」(『イザヤ書上』岩波文庫の註釈)。なお，Saraph (Seraphim) の語源は，「燃えるもの」あるいは「(悪人を) 燃やすもの」である (RGG, Bd. II, Art. Geister..., von H. Ringgren, Sp. 1302.)。
62) 訳文は岩波文庫『福音書』塚本虎二訳，による。これは訳者の短い敷衍を含んでいる。なお青銅の蛇への言及は全新約聖書でここだけである。Das Neue Testament Deutsch (NTD) 4, Joh.-Ev. von S. Schulz, 12. Aufl. 1972, S. 60.
63) 訳文は新共同訳による。
64) KD IV/3, S. 722f.
65) NTD 2, Mt-Ev, von J. Schniewind, 12. Aufl. 1968, S. 127.
66) NTD 2, Mt-Ev, von E. Schweizer, 13. Aufl. 1973, S. 155.
67) KD IV/3, S. 808.
68) NTD 11, Offenbarung, von E. Lohse, 9. Aufl. 1966, S. 68f.
69) Meyers Kommentar, Offenbarung, von W. Bousset, 6. Aufl. 1906 (1966), S. 341.
70) 訳文は塚本虎二訳，聖書知識社，1976，による。
71) Bousset, S. 337.
72) AaO. S. 351. なおこのブセットの注解は宗教史的比較が詳細で，興味深い。
73) AaO. S. 366.
74) NTD 11, S. 89.
75) これについては前掲拙論「木について」参照。
76) 樺山紘一，前掲書109頁の図版。
77) ヤコブス・デ・ウォラギネ『黄金伝説』2，前田敬作他訳，人文書院，1984，75頁以下。本書からの引用は本文中の（ ）内にその頁数を記す。
78) 同書の訳注 (一)。
79) RGG, Art. Christussymbole, von K. Wessel.
80) 松原秀一『中世ヨーロッパの説話』中公文庫，1992，113頁以下。
81) マドレーヌ・P・コズマン『ヨーロッパの祝祭典』加藤恭子他訳，原書房，1986，2頁以下，26頁，135頁以下。
82) Heiler, Erscheinugsformen..., S. 87ff., ders., Religionen..., S. 20.
83) 水之江有一『図像学事典』岩崎美術社，1991。本書からの引照は本文中の（ ）内に項目番号を記す。なお，柳宗玄他編『キリスト教美術図典』吉川弘文館，1990，372頁以下，参照。
84) 現実概念については本紀要第36輯所載の拙論「神学的現実」参照。
85) この語は「伝説」「言い伝え」と訳せない，バルト独特の表現である。KD III/1, § 41, 1. 「創造，歴史，創造物語」の項，特に S. 88ff. 参照。